

京人形いろいろ

江戸時代には、雛人形のほかに、さまざまな人形が誕生しました。その多くは、ここ京都が発祥の地と考えられています。

御所人形 ごしよにんぎょう

木彫りに胡粉を塗り重ねて磨き上げ、三頭身のあどけない幼児の姿を写した人形。明治時代以前には、その白く美しい肌から白菊、あるいは白肉、頭の大きなところから頭大、扱った人形問屋の名前から伊豆蔵人形などと呼ばれていました。初期には子どものあどけない仕種を写すのみでしたが、やがて組み合わせて物語や場面を表現するようになりました。



御所人形 春駒持ち 京都国立博物館

衣裳人形 いしょうにんぎょう

衣裳をまとった胴体に、頭部や手先を加えた形式の人形。子どものかわいらしい仕種を写したものや、婦女・遊女・若衆などの風俗を写した浮世人形、能の舞台姿そのままの能人形などがあります。



衣裳人形 婦女立姿
入江波光コレクション・入江西一郎氏寄贈
京都国立博物館蔵

賀茂人形 かもにんぎょう

柳や黄楊を素材にした小ぶりの木彫りの人形で、顔や手足は木地を生かし、衣服には縮緬や金襴などの裂を木目込んでいます。こまやかな刀さばきをみせる顔と、着衣の裂とが調和し、素朴な味わいがあります。賀茂人形の主題は多様ですが、いずれも明るく楽しい表情に満ちています。



賀茂人形 七福神

長い年月を生きている人形には、汚れや傷みがありますが、人形の重ねた歴史の重みとしてご鑑賞ください。

雛まつりと人形

京人形を楽しむための鑑賞ガイド



立雛 次郎左衛門頭 京都国立博物館

特集展示 雛まつりと人形
2026年
2月7日(土)〜3月15日(日)
平成知新館(1F・2F)

雛人形を飾って女子の成長を祝う雛まつりは、古くから行われているように思われがちですが、人形を飾ってこの日を祝うようになったのは、江戸時代の初めとされています。

雛まつりの起源は、上巳の節供という三月のはじめに行われた祓いの行事です。ここでは、紙など簡素な素材で作られた人形が、穢れを引き受ける人間の形代として用いられていました。それがやがて、同じく三月三日頃に公家の女子たちが行っていた盛大なお人形遊びである雛遊びと結びつき、江戸時代には、飾るための豪華な雛人形へと変化していききました。

江戸時代の雛人形には、その時代の元号を冠して呼ばれる寛永雛・享保雛や、製作した人形師の名にちなむという次郎左衛門雛、江戸で完成した古今雛、公家の装束を正しく写した有職雛などがあります。

本年は、恒例となっている関西風の御殿雛飾りにいたる雛人形の変遷と、各種の京人形を展示するほか、雛人形を通して表現された天皇と皇后の姿の移り変わりに注目します。江戸時代の人々が漠然と抱いていた天皇のイメージが托されたものから、写真などを参考にその姿を正確に写そうとした明治時代以降の品まで、いつの世も憧れのまなざしをもって、大切に守り伝えられてきた雛人形の諸相をお楽しみください。

雛飾りの東西

雛まつりといえば、内裏雛に三人官女、五人囃子などの人形に加え、たくさん
の雛道具が幾段にも並べられた、雛段の光景が思い浮かびます。

この豪華な「段飾り」は、江戸時代の終わり、華やかな武家の雛飾りになら
て、江戸（現在の東京）で完成したと言
われています。江戸では、町人の女子が
武家の奥向きに奉公することがありまし
たが、雛の節供には、近親者も屋敷の雛
飾りを拝見することが許されました。大
名家では、姫君の婚礼道具と文様も製作
技法もまったく同じで、婚礼道具の縮小
版ともいえる豪華な雛道具が見られま
す。このような華やかな雛道具を加えた
飾り方が江戸の町人に影響を与え、「段
飾り」が完成したと考えられています。

それでは京都や大坂といった上方（現
在の関西地方）ではどのような飾り方が
主流だったのでしょうか。上方では「御
殿飾り」、つまり内裏雛が住まう御殿を最
上段に置くのが一般的でした。雛段は二
段程度、豪華な雛道具は少なく、江戸で
はまず見られないおくどさん（台所）や
調理道具が加えられます。残念ながら、

現代ではこの飾り方はほとんど見られな
くなりました。

江戸時代の終わりに上方に生まれ、後
に江戸で暮らした喜田川守貞の『守貞漫
稿』によれば、上方の雛飾りは江戸より
も質素で洗練されていないように見える
けれど、これは女子に家事を習わせるた
めだ、と記されています。こんなところ
にも、実質的と言われる上方の教育方針
が見え隠れするようです。



段飾り雛 五世大木平蔵作 山本あや氏寄贈・京都国立博物館
雛御殿はありませんが、婚礼道具の中におくどさんが加えられているところに、江戸と上方、
ふたつの伝統が融合した姿を見ることができます。

男雛と女雛―右と左の不思議―

男雛と女雛の正しい並べ方はよく話題になりますが、左
右両説とも根拠があり、どちらが正しいとは言えないよう
です。

内裏雛は、天皇と皇后の姿がお手本ですから、伝統的な
宮中の席次に従えば、向かって右は男雛、左は女雛となり
ます。そのため、伝統を重んじる関西地方では、現在でも
この並べ方が主流です。

しかし、明治時代を迎え、宮中に西洋式の儀礼が導入さ
れると、それに倣って男女の占める位置が逆になりました。
そのため、現在の皇室の規定に従えば、向かって右は女雛、
左は男雛となります。一説には、昭和天皇の即位式の際に
撮影された写真を参考に、東京の人形業界が雛人形の左右
を置き換えたことに端を発し、この並べ方が関東を中心に
広まったと言われています。

内裏雛のモデル

内裏とは天皇の住まうところ。内裏雛のモデルは、天皇
と皇后の姿です。本年の展示では、雛人形を通して表現さ
れる天皇と皇后の姿の移り変わりに注目します。

江戸時代の人々が漠然と抱いていた天皇のイメージが託
された品から、写真などを参考に、その姿を正確に写そう
とした明治時代以降の品まで、雛人形に込められた、市井
を生きる人々の憧れに満ちたまなざしを感じてください。

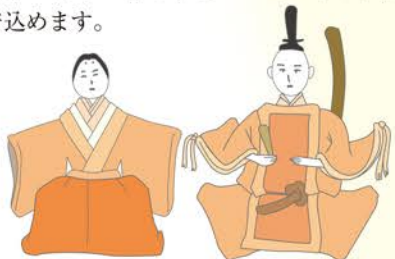
立雛

三月三日に人形を飾る雛まつりの始まりとして、
人間のけがれを木や紙でできた人形に移し、
川や海へ流す祓いの行事があります。自立
できない立雛は、けがれを移す人形から
発展したと考えられ、飾ることを目的とし
ていなかった初期の形式を伝えています。



寛永雛

江戸時代前期（17世紀）の古風な雛人形。高さは
10cm ほどで、坐雛の初期の例のひとつです。男
雛は頭と冠を一緒に作り、髪の毛と冠は墨塗
り。女雛は両手を開き手先をつくらず、小袖を
袴に着込めます。



古式享保雛（元禄雛）

寛永雛よりもやや大きな雛人形。男雛の作りは
寛永雛とほとんど変わりませんが、女雛には手先
がつき、装束も十二単風の襲装束になります。



享保雛

江戸時代中期（18世紀）に町方で大流行し、その
後も長く作り続けられた雛人形。面長の端正
な顔立ちで、50cm にもおよぶ大きなものもあり
ます。毛髪は毛植えになり、公家装束を模した
金襴の装束を身に着けます。



さまざまな雛人形

時代とともにさまざまな変化してきた雛人形。
頭づくりや手の動きなど、細部にご注目
ください。



* 雛人形の名前についた元号は分類名称です。
製作年代とは必ずしも一致しません。

明治時代

次郎左衛門雛

京都の人形師・雛屋次郎左衛門がつくり始めたとされ
る、丸顔に引目・かぎ鼻・おちょぼ口のおっとりした
面貌の雛人形。18世紀後半には製作されていたよう
です。大名家や、公家の子女らが入寺する門跡
尼寺に伝えられる
作例もあります。



古式親王雛

享保雛の流行の後、実際の公家装束に配慮しつつ、18
世紀半ば以降に京都近辺で製作されたと考えられる雛
人形。一般的には目にしない当館独自の分類名称です
が、大型の特製品で、京都の旧家に伝来しました。



古今雛

江戸の名工、二代目・原舟月が大成したとされる、江
戸生まれの雛人形。安永年間（1772～1781）からつく
られ始め、江戸での流行を受けて上方の雛人形にも影響
を与えたと考えられており、当館ではこれらを京風古
今雛と呼んでいます。実際の公家装束にならうものの、
京風古今雛では女雛の袖口に刺繍を加えるなど、より
豪華に仕立てられています。主に町方で飾られました。



イラストは京風古今雛

有職雛

装束に明るい公家の監修のもと、公家や武家のために
製作された特別注文の雛人形。有職とは、宮中にまつ
わる伝統的な儀式や行事にともなう知識をいいます。
髪型・装束の色目・文様など、
忠実に公家の装束を再現しよ
うとするのが特徴です。

